

「荻生録造と沼津兵学校周辺の医師たち」

国立歴史民俗博物館総合研究大学院大学の樋口雄彦准教授。

樋口准教授は、「旧徳川家が陸軍士官を養成するために作ったのが沼津兵学校。軍隊と言っても軍医が必要で（医学と）無関係ではない」と話し始めた。

兵学校に縁があって医学を学んだり、医師になったりした人達は、兵学校附属小学校に学んで後に医師になった荻生録造らに比べると、沼津で直接医学を学んだという点で、沼津との結び付きが強い。そのため、樋口准教授の話は沼津病院の医師や兵学校の医学資業生、同病院で医学を学んだ人達を重点にして進められた。

はじめに沼津病院。同病院の院長（頭取）を務めたのが杉田玄端で、頭取のもとに一等医師、二等医師、三等医師、三等医師並という肩書があったという。

「沼津兵学校附属の病院を沼津病院と言ってしまうと正確ではない。経緯は兵学校の附属として作られたのだが、後に独立した。陸軍の将校が集中して移住したのが沼津であり、静岡藩の陸軍士官を養成するのが沼津兵学校。移住した人のためにも医師は必要だったので、陸軍の医師がはじめから存在し陸軍医局（の施設）を西ノ条（現在の西条町）に作った。徳川家陸軍医師が集められた」と樋口准教授。

玄端が明治元年十二月に頭取に任じられ、少し遅れて翌年三月に医局を開局。沼津の一般住民も受診できた。陸軍局に所属する病院だったが、五月になると、その仕組みの見直しが行われた。

旧幕臣は静岡県東部地域から愛知県東部地域までの広い範囲に何千人単位で移り住み、静岡藩全体として明治元年に駿府（静岡）病院が出来ていたが、陸軍だけを特別視するのではなく、静岡病院が一元的に県内の病院を見るところという体制にしようと「陸軍」という名称が取れ、八月には沼津も「沼津病院」になった。

この時に沼津兵学校の付属的機関であった位置付けが変わった。

「沼津病院」では、地元の医者や村医者を新たに採用した。地元の町医者、村医者と呼ばれた人達だった。その中の一人、荻生洪斎は録造の養父になった人で三等医師並に採用された。

「医師が不足していたという面もあっただろうし、地域に密着した人を採用する方が何かと便が良いということもあっただろう。静岡病院の方で同じように採用している。こういう人達が医学教育を担った」と樋口准教授は説明。

また、「『陸軍医学所規則』というのを医局の開局と同時に布告し、生徒の募集をかけた。兵学校附属小学校の規則と重なっている部分がある。歩兵、砲兵、築造の兵士を育てるのが兵学校の役目だが、それ以外の勉強をしたい人は、こちら（医局）に来なさいというようになっている。（兵学校と医局の）両方重ね合わせて運用する仕組みになっていた」という。

さらに、兵学校附属の医局という位置付けが単なる静岡病院傘下の病院という位置付けになり、「医学所規則は引込めざるを得なくなったと思う。一般の医師を養成するために医学教育が継続されたというのが本当のようだ」とした。

沼津兵学校の医学資業生については、「資業生は兵学校の正式な生徒で、それでは正式でない生徒がいるのかということになるが、兵学校が出来たばかりのころは陸軍士官以上を三百人ぐらい、暫定的に生徒にした。その後、試験をして合格した人を正式な生徒として資業生と呼んだ」という。

明治二年から五年ぐらいまで、一期から九期生までの範囲で二百二十人ほどが資業生として採用されたという。

その資業生の中で体が弱く、兵隊を指揮するよりは医師、あるいは小学校の教員になっ

た方がいいのではないかという人がいて、途中で、そうした方向に進路を変えてもいいという方針が取られ、医学資業生を募集。三期から六期生ぐらいまでの中から十三人が手を上げたが、兵学校の中でも試験に通った優秀な人物で、しかも自ら医学を志した人。

彼らは兵学校で医学を学ぶしかなかったが、沼津病院の医師が教えたという形跡はないという。十三人は明治四年に静岡病院の方に回されたが、仕組みが変わったため数カ月後には沼津兵学校の生徒から、静岡病院に籍を移した。

同年五月に彼らが沼津兵学校の生徒ではなくなったことを裏付ける資料として、兵学校の中では西周と同様に名を知られた田口卯吉の履歴書が明らかだという。

「静岡病院の方が大きかったし、医師の顔ぶれも充実していた。杉田玄端は素晴らしい経歴を持っていたが、年齢的にもう古くなっていた。静岡病院はオランダ医学を勉強してきたばかりの人が院長になっていたのも、最新の医学を勉強できた」と十三人が静岡病院に移ったのはいいことだとした。

しかし、「十三人全員が医師になったのではない。田口は全然違う道に進んだ。二人が陸軍の医師になり、一人が獣医になった以外は、時代小説家など畑違いの人が多く出た。なぜか医学の道をまっすぐ行った人は少なかった」と説明した。

沼津の医師達について話を進める国立歴史民俗博物館総合研究大学院大学の樋口雄彦准教授は、沼津の病院で医学を学んだ二十一人の名前を挙げ、「この人達は、どのような立場で医学を学んだのか。後の履歴書などを見ると、士族の一人は『沼津病院に入門。杉田玄端に付いて学んだ』というような書き方がされている。学歴の記載の仕方はいろいろあるが、『沼津病院へ入門し、〇〇に従って学んだ』という書き方をされると私塾に入門したという意味にも読み取れる。病院で生徒を受け入れたのか、医師が個人を対象に教えていたのか、あるいは両方と受け止めることもできる」と判断の難しさを示唆。

また、沼津藩士で沼津病院に学んだ士族の三人は「全員、医師の息子ではない」とし、「今は世襲議員というのが話題になっているが、江戸時代は日本中が世襲だった。そんな中で静岡藩は実力主義（を採用する先進的藩）だった。（資業生の）十三人の中でも医師の息子だったと、はっきりしているのは一人だけ。あとは医師の息子ではなく、職業の選択が進みつつあった」とした。

沼津病院で医学を学んだ平民の中には、沼津のほか田方郡、富士郡などと遠方から学びに来た人達もいた。「地元の平民出身者には、もともと医師の家に生まれた人が多かったのは事実」だとし、ある程度身分が高くなければ医師を目指すことはなかったが、その中に、井上靖の祖父、井上潔がいた、という。

兵学校附属小学校で学び、後に医師になった人物は八人。この中に杉田姓が二人いるが、二人は兄弟で玄端の息子。玄端は『解体新書』で知られる杉田玄白の孫で杉田家は蘭学の名門。

また榊姓が二人いるが、やはり兄弟で、兵学校の図画教授、榊綽（ゆたか）の息子。兄は精神科のパイオニア、弟は産科を専門とした。

荻生録造と、杉田兄弟、榊兄弟の五人は旧幕臣の出身だが、あとの三人は地元の医師の息子や農家の次男などで、その後、開業医になったり、軍医になったりしている。

ところで、録造が養子に入った荻生家は沼津旧家の一つ。「もともと土豪的な有力者だったと思うが、沼津宿の問屋（宿、人馬の差配の責任者）の役を代々務めた。途中で別の家に屋号を譲り『元（もと）問屋』にして旅籠を営んだ。本陣、脇本陣に次ぐ格式ある旅籠だった」という。

問屋から分家して医師を目指したのが録造の祖父に当たる人で、その息子が録造の養父の洪斎。洪斎は、いろいろな名前と漢字で記されているが、汀（みぎわ）というのが正式な名。

この汀という人について樋口准教授によれば、「まだはっきり言えないが、不思議な存在だった」という。

沼津藩年寄の水野伊織が書いた『水野伊織日記』には「洪斎」や「洪道」という名前が頻繁に出てきて、大阪から広島へ長州討伐に向かった沼津藩七代の水野忠誠（みずの・ただのぶ）の供をした記録が残っている。

洪道が毎日のように診察に訪れていたということも書かれているが、同じ時期の『御家臣姓名録』には荻生洪道の名はない。正式には沼津藩士になっていなかったが、藩に医師が足りず、臨時雇用の藩医だったという推測もできるという。

さらに、洪道が藩の御典医だった柳下家に送った手紙の写しがあり、差し出した住所は沼津宿の「本街」となっている。「本街」というのは本町のこと。武家屋敷のある区画ではないので武士ではなく町人の医師だったことを裏付けるもの。扶持米などをもらって藩に出入りしていたのではないかと見ることもできるが、「不思議な立場だった」と樋口准教授。

明治維新で水野家が上総国（千葉県）市原郡菊間に移った際には、ついていかなかったことから正式な沼津藩士ではなかったようだという。

一方で、兵学校の英語教師が書いた『乙骨太郎乙日記』という、明治元年十月の一カ月分だけの短い日記には、沼津から出て行く水野家と入ってくる徳川家が混ぜこぜの状態の時、江戸からやって来た乙骨のところに「水野藩の荻生と島津が来た」と書いてある、という。それには荻生について「水野藩の藩士」と記されており、乙骨が単にそう受け取っただけなのか（乙骨の勘違い）、あるいは実際にそうだったのかは不明。

また、その日記には「荻生小児来たる」とも書かれており、当時、まだ録造は荻生家の養子になっていなかったのも、実の息子がいたのかも知れないという。

録造が荻生家の養子に入ったのは明治十七年。十八年一月に家督を継いだ、とある。十七年は東京大学を出て千葉の医学校に就職した年。荻生汀は十一年に亡くなっているため、その間の荻生家の当主が不明。どういふいきさつで、旧幕臣の福永家の生まれである録造が町医者で荻生家に養子に入ったのかも分からない、という。（おわり）

（沼朝平成21年5月2日号3日号）